

# 激動のインドシナ 平和の構図を探る

## 専門家座談会

ロン・ノル大統領の国外脱出によるフロン政権の事実上の崩壊。時刻刻みで塗り変えられてゆく南ベトナムの「勢力地図」。激動するインドシナ情勢は、七三年一月に調印されたベトナム和平協定の「意味」を改めて見直させようとしている。

協定調印後二年あまり続いた「内戦」は、どんな形で終幕を迎えるのか。インドシナ情勢に深いかかわりを持つ米軍と中国、ソ連の三天国はどうか動くのか。本紙は、陸井 三郎氏（評論家）、中嶋 嶺雄氏（東京外大助教授）、糸賀 滋氏（アジア経済研究所）の

—ロン・ノル政権の事実上の崩壊で、カンボジア情勢はボストン・ロン・ノルが焦点になってきた。カンボジアがどう動くのか。当面どんな動きが予測されるか。

**カンボジア終戦内閣が焦点**

陸井 ロン・ノル退陣は既定の事案であり、あとはどんな終戦処理内閣ができるかということだ。

中嶋 私はむしろ、意外に早かったと感じている。今回の退陣にはソ連が見限ったことと、ベトナムの情勢悪化が大きく影響しているように思う。シアヌーク殿下は今すぐ終戦処理に乗り出すよりは、復讐する前に、影響力を拡大することに力を上げ、内外政両面で立場の強化をねらうのではな

# パリ協定生き返る

## 南ベトナム チュー退陣後に停戦？

## カンボジア シアヌーク政権確実



### 出席者

国際問題評論家

陸井 三郎氏

東京外語大助教授

中嶋 嶺雄氏

アジア経済研究所研究員

糸賀 滋氏

(司会・本社外報部長出田裕)

—南ベトナムで解放勢力の攻勢が鋭いというが、どこまで力で押し進めているのか。

**リスク大きいサイゴン攻略**

中嶋 解放勢力がサイゴンを力をつけているのは、サイゴンで攻めるとはリスクが大きい。一つは米軍の介入を招く危

### サイゴン攻略

—南ベトナムで解放勢力の攻勢が鋭いというが、どこまで力で押し進めているのか。

糸賀 米軍はカンボジアに対し、北側の切りこみはしていない。いま残っているのは政治的介入だけだが、米軍としてはこの攻めを容認するかどうかだが、私はそこを容認しないと思っている。解放勢力は、一つは米軍の介入を招く危

### デタント外交

—インドシナの新局面に、ソ連はどうか出るだろうか。

中嶋 中国に近いアジア諸国が、中国との国交回復を最も遅れている。イデオロギーを超えた中国への潜在的脅威感があるためだ。北ベトナムにしても、中国に対する不信はかくし切れないものがある。中ソ対立は世界的規模に拡大され、アジアでも相互にけん制し合っている。インドシナ半島情勢とのからみでは非常に複雑な推移を示さざるを得ない。

### 初めて現実にぶつかった米

—現在の情勢から振り返ると、パリ協定はどんな意味を持っていたのだろうか。また、今後のインドシナ情勢にどう関連するのだろうか。

中嶋 パリ協定は、米国の利益に基づいたものだったが、キッシンジャー長官自身、基本的にアジアを理解していただとは思えない。それは、ロン・ノル政権崩壊で日本を含むASEAN(東南アジア諸国連合)全体の政策の再検討を迫られており、軍事的なテコ入れを再発動出来る状態にはない。

### チュー政権のお荷物「難民」

陸井 難民は、米軍介入時に採用した戦略によって意図的に作り出されたものだ。つまり農村を破壊し、住民を都市に追い出した結果生じたもので、チュー政権はそれを生産人口に転換できなかった。一部の難民の中に共産主義に対する恐怖心があるのは否定しないが、チュー政権は「難民づく



アヌークと話し合う手段がない。そのワンストップとして今回のロン・ノル退陣を工作したと思われるが、これがすぐ和解に結びつくとは思えない。結局、米軍はシアヌーク政権の復讐を前提に話し合うというところに追い込まれよう。

陸井 カンボジア戦争は七〇年の米、南ベトナム軍の介入によって始まった。それがタメたとなったら、こんどはロン・ノルをおおして終戦処理に走るのだから勝手すぎるが、これにひとひかかっていく日本外資もどうだろうか。



サイゴン側が有利という調査結果を出している。和平協定以後二年余で、米軍などが南ベトナムに行った軍事、経済援助は億単位に達している。中ソの援助で「北」と解放勢力が強くなったといわれるが、中ソの援助が米軍を上回るとは思えない。やはり、表面に現れずに浸透していた解放勢力と、チュー政権との力関係の変化を抜きにしては理解できない。もともとベトナムでは通常の戦争ではなく、地図で色分けされるように解放勢力が一気に南下している。どうだろうか。

中嶋 前副大統領のケエン・カギー政策の上からインドシナ半島に権威を保つことは至上命令なのだ。しかし、米軍は援助でも、再武力行使でも国内外でコンセンサスが得られず、サイゴン政権を少しでも延命させる以外打つ手を持たないのが現実だ。

陸井 米軍はパリ協定で、ベトナムからの軍事撤退を図り、ベトナムの現状凍結をねらった。しかし、米国の利益中心に展開されてきたデタント外交への挑戦であり、そのワタ組みからはみ出したもの。国際政治、経済の重要地点でこうした動きが出たことから、従来の大國によるデタントのワタ組みは変わらざるを得ない。